

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？2

サリエル

悪役令嬢である妹ディエンヌの尻拭いに奔走する魔王の三男。ぼっちゃりもちみな体型だったはずだが……？

レオンハルト

サリエルの義兄で婚約者。次期魔王候補で、サリエルのことを溺愛して止まない。

人物紹介

マルチェロ

レオンハルトの従兄弟で、ディエンヌの婚約者。柔和な笑みを浮かべる腹黒系士。

ディエンヌ

サリエルの異父妹で、高飛車と我儘に拍車がかかった悪辣な悪役令嬢。

ファウスト

バックヤス公爵家の子息。サリエルにとても懐いているストイックな青年。

アリスティア

偉げな侯爵令嬢で、乙女ゲーム『ロンディヌス学園』どんな悪魔と恋しちゃう？のヒロイン。

目次

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？ 2

番外編集 みんなの気持ち

魔王の三男だけど、備考欄に

『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてある？2

ぼくはサリエル・ドラベチカ。もっちりぼつちやり我が儘ボディは相変わらずの、魔王の三男である。

六歳のとき、ぼくは妹のディエンヌの魔法で空に飛ばされて意識を失った。そして目が覚めたら、なんでか『備考欄』が見えるようになっていたんだ！

ぼくの備考欄には『悪役令嬢の兄（尻拭い）』って書いてあって……優しいお友達や、ぼくのここ、婚約者でもあるレオンハルト兄上に助けてもらいながら、ぼくははなはだ不本意ではあるが悪役令嬢らしき妹ディエンヌの尻拭いを絶賛実施中なのであった。

それで、今年の三月に十二歳になったぼくは、ロンディウヌス学園の入学資格を得て、本日四月一日が、いよいよロンディウヌス学園の入学式なのであるう。

昨日からそわそわしてよく眠れなかった……こともなく、ぐっすり寝た。けど、やつぱりちょっと早起きしてしまった。

だって新しい生活がはじまるんだもの、ドキドキのワクワクでしょ。

小鳥のモチーフが彫刻されたクロゼットの前に、学園の制服一式がハンガーにかかっている。

その白さは目にまぶしく、燦然と輝いている。そう、制服は白なのだ。

ぼくはコロリンと転がってベッドを降りると、洗面や整髪などの身支度を整え、満を持して制服に袖を通した。

学園の白い制服は、襟元に緑色の縁取りがある。学年によって色が違うらしく、一学年上のラーディンの制服は青い縁取りだった。

『攻略対象のイメージカラーが採用されているんだ。瞳の色が、ラーディンは青、マルチェロは緑だから、来年はシュナイツの瞳の色の赤が襟の色になると思うよ』

ぼくの口を使って言ったのは、インナーだ。

インナーというのは、ぼくの中にいる別人格で、いつの間にかぼくの中にいた謎人物である。

六歳の『ディエンヌの、ぼく殺人未遂事件』のあと、ぼくの中にインナーがいることに気づいたんだ。長く一緒にいるから、もうぼくの一部みたいなものだね。

そのインナーがつい最近、ぼくがいるこの世界は、インナーが前世でプレイしていた乙女ゲームの世界観と酷似していると言い出した。ぼくは『ふーん、そうなんだあ』って思っている。

「ファウストとエドガーはイメージカラーにならないのですか？」

『攻略対象が同じ学年にいる場合は、登場が早いほうの色になる』

とても緻密に設定されているようだ。ふーん、難しそうなゲームだね。

そうそうゲームといえば、今日までの間に、インナーにゲーム内容を思い出せるだけ思い出してもらって対策を練ったのだ。

ぼくの妹である悪辣なディエンヌは、ゲームでは悪役令嬢である。その末路には、処刑ルート以外に、国外追放ルート、修道院で矯正ルートなどがあるらしい。

どのルートに行っても、ディエンヌは主人公をいじめたとして断罪されるが、その悪さの度合いによって、処刑、国外追放、修道院にて矯正、のいずれかのルートに進むようだ。主人公をいじめるのは決定事項みたいだね。

主人公が死んだらバッドエンドで、ディエンヌは処刑ルート確定。でも妹が処刑になったら、兄上が魔王になるときの障害になるかもしれないでしょ？ だからとにかくぼくは、バッドエンドを阻止したいわけ。

主人公が死にさえしなければ処刑にはならないと思うので、つまり主人公を守り切れたらぼくの勝ちなのだつ。たぶん。

あと、ディエンヌが学園に行かないという一番楽なルートでも、勝ちであるう。

そして、主人公が兄上と恋愛をはじめないために、決して主人公を兄上と会わせてはいけない。絶対絶対、運命の出会いを阻止するのだ!!

『小姑だな。うぜえ、小姑』

「いいえ、ぼくは腐っても兄上の婚約者ですから、当然の権利ですう」

インナーにからかわれたけど、ぼくは猛反発する。兄上は、ぼくの兄上なお!

そうこうしつつ制服に袖を通したぼくは、姿見の前に立った。制服の下に着るシャツは自由なので、襟にレースの飾りがついている白いシャツを選んだ。

鏡を見ながらぶつとい指で襟やスカーフタイの形を整え、赤い宝石のブローチを着ける。この宝石は兄上からのプレゼントで、すっごく強い威力の防御魔法がこめられているのだ。

そうして『白い制服の素敵なぼく』が爆誕したつ。むふーん!

蛍光レッドの髪が今日も艶やかで、いい感じ。

……いや、わかっている、みなまで言うな。白い制服に赤いトサカでニワトリ形状に拍車がかつているということは。

ううむ、と鏡を睨んでいた、そのとき。コンコンと窓をつつく音がした。

はあつ、来たつ! やつが来るのはわかっていた。

今日は入学式だけでなく、ぼくとやつの全面対決の日でもある。

臨戦態勢のぼくは、カーテンをシャッと開ける。するとそこには、当然ここにおりますけど、なにか? というようなふてぶてしい顔つきのスズメガズスがいた。

スズメガズスは、清らかな赤子をさらって育てるという迷惑な鳥の魔獣。体長は一メートルほどで、まあいいフォルムで、姿はインナー的に言うスズメだ。

毎年、春になるとぼくのところへやってきて、なんでかぼくをさらおうとする。ぼくはいつも、スズメガズスの口車に乗ってしまうけど……

しかし今年のぼくは去年までのぼくやんなぼくとは違うぞ!!

なんていったって学生になる、つまりは大人の仲間入りなんだからねっ!!

ぼくはスパーンと窓を開け、颯爽とスズメガズスに言い放った。

「どうです、スズメガズスうう！ 学園の制服を優雅に着こなしたぼくを見て、驚いたでしょう？ 身長だってもうスズメガズスより大きい素敵な大人なのですから、いい加減ぼくのこと諦めてくださいねっ」

そう、ゲンと身長が伸びたのだ。去年から、五センチくらい……

でもでも、すごい成長スピードでしょ？ スズメガズスより頭ひとつ分は大きいんだから。

……横幅は、変わりなしです。ええ、安定のぼっちゃりですけど、なにか？

「おお、なんと立派な姿だ。あの子がこんなに大きくなるなんて、妻にも見せてやりたい」

するとスズメガズスは、目を潤ませてそう言った。やつは会話できる魔獣なのだ。

「つ、妻？ 奥さんがいるの？」

「ああ、しかし妻は病弱で、ここまで飛んでこれないのだあ。でもこの雄姿を一目だけでも妻に見せてやりたいなあ。もしかしたら妻は、来年まで生きられぬかもしれないなあ」

「そ、そうなの？」

長年お付き合っているスズメガズスに、少し同情してしまう。

「でもぼくは、もうスズメガズスよりも大きいよ。運べないでしょう？」

「私は力持ちなのだ、安心せいつ、さあ乗れ。さあ、さあ」

急に元気になったかと思うと、スズメガズスは意気揚々と白い布を広げる。

ぼくがいぶかしげにその様子を見てみると……背後からキィとドアの開く音がした。

「……サリエル様？」

振り向くと、扉の隙間からぼくの専属侍女エリンが、ジト目でこちらを見ていた。

の、乗りませんよ。知っていますよ、これがスズメガズスの作戦だということは。

そう思っ、ぼくはエリンに首を横に振ってみせる。

「けっ、人情に訴える作戦も失敗したあ。覚えてろよおおお!!」

するとスズメガズスは、白い布をサッと回収して飛び去った。

あああああ、またスズメガズスにしてやられるところだったあ!! いえ、あんな見え透いた罠には引っかけられませんよ。大丈夫に決まっているじゃあないですか。

「またスズメガズスの罠にかかりそうになって……昨年は来なかったから安心しておりましたのに」

ぼくは口をきゅうつと引き結ぶ。ごめんよ、エリン。実は昨年も来たんだ。

学園に入学するまで、貴族のお子様は魔王城にて月一で開催される子供会に参加する。

やつは昨年の子供会会場の庭に降り立ったのだ。お友達のひとりであるエドガーがスズメガズスを見て『清らかな魂が好物なのです』と叫んだ。

ああ、魔王の三男が清らか認定だって、バレちゃったあ！

のみならず、毎年スズメガズスがぼくを迎えに来ることを大事なお友達たちに知られてしまいいい……ぼくは史上最悪の屈辱を受けたのであった。

その場には兄上の従者であり護衛のミケージャもいたのだけど、おそらく彼はぼくのプライドのために、エリンに報告しないでくれたのだろう。

でも、今年も来ちゃった。昨年の気遣いがふいになってしまった。ミケージャ、ごめんよ。
「エリン、ぼくがスズメガズごときの罠にかかるわけじゃないのです。もう一人前の大人なのですから」

「まあ、サリエル様。とつても凛々しいお姿で、エリンは感動いたしました」
大きな耳をピルピル震わせ涙ぐむエリンを見られて大満足だ。
さあ、この姿を兄上に見せに行こう。

★★★★★

ピンク色の花びらがひらひらと降る桜の木の下。

制服に身を包んだぼくは、ひとり物憂げに兄上を待っている。

丘を覆う草原が緑に輝き、桜のピンクと、ぼくの制服の白が、鮮やかなコントラストを描いていた。

ぼくが手を差し出すと、丸い指に小さな花びらがそっと乗る。その花びらを掴もうとするけれど、ひらりと逃げてしまった。ぼくは、まあいい手を所在なげにもみもみして……

そんな感じでメルヘンに浸ってはいるが、エリンがそばにいたのでひとりではない。

兄上を待つ健気なぼく、というシチュエーションなの！

それはともかく、なんで兄上の屋敷の敷地内に桜があるのかというと、ぼくが植えたからだ。植

えたというか厳密には、以前ももんもを生やしたのと同じ要領で、ポンポンと地面を叩いて大地にお願いしたのだ。

だってえ、インナーの脳内イメージにある『新生児が桜の木の下でっこり』っていう光景を演出したかったんだもん。

インナー的に言うとか、年齢的に、ぼくはこれから中高一貫の学園に入る、みたいな感じらしい。

中高一貫という言葉はあまりピンとこないけど、四月までに満十二歳になった子が六年間学ぶ学校ってことみたいだから、まあ合っているね。

『給食のおばちゃんが、にっこり……』

そう言っ、インナーが脳内で白い割烹着のおばちゃんを見せてくる。インナーはたまにぼくを給食のおばちゃんと言っ、てイジるんだっ。もう、インナー、雰囲気壊さないでっ!!

というわけで、丘の上で待つぼくの頭上には、薄ピンクの花がワツと咲いていて、いい感じに花びらが舞い落ちていた。

ひらひらと舞う花びらの軌道は、インナーがぼくの脳内で見せてくれたものと同じ。不規則で、だからこそ華やかで、優雅だ。うーん、ロマンティック。

ぼくはにこにこして桜の花びらを見ていた。

すると、遠くのほうから兄上の乗る馬のひづめの音が聞こえてきた。

実は、せっかくのいいロケーションかつ、ぼくの入学というめでたい日ということで、この光景を絵に残そうということになったのだ。

この世界には写真という、インナーのいた世界の優れたもののグッズはないから、絵師に残しておきたい情景を描いてもらうしかない。

ふたり一緒に描いてもらうので、兄上もそれなりにおめかしをしている。黒くて大きな馬に乗り、豪華な服装でバッチリ決めた髪型の兄上は、言うまでもなく立派で格好良い。

十七歳になった兄上は、魔王と変わらないくらい体格が大きくなって威厳たっぷりだ。耳の後ろからのびる三重に巻いたツノはとてもたくましい。長くて艶やかな深みのある藍色の髪は毛先に向かってゆるくウェーブして、大人の色気を醸し出している。

夜会などで着るきらびやかな黒い礼服は、兄上の体軀を引き締めて見せていて、その上から黒のマントを羽織る姿はもう、ゴージャスアンドエレガント。

もう兄上が魔王でいいと思う。そのような出で立ちだった。

いつもは厳しさをたたえる切れ長の目は、ぼくを見ると柔らかくなる。兄上は優しく微笑んだ。胸がきゅううとなるう!!

この頃はインナーがきゅううなのか、ぼくの心臓がきゅううなのか、よくわかりません。

というかもう、もっちりのぼくはどうでもいいから、今の兄上の顔を絵師様描いてえ!! 即座に、超速で、今すぐ描いてえ!!

「待たせたな、サリュ」

兄上が馬から降りたので、ぼくはブヨと抱きついた。

ぼくと兄上の身長差は、かなりある。兄上は二メートル近い高身長で、ぼくは今、一三〇センチ

くらい。まだ兄上のウエストに手を回すのがやっとだけど、一応これが挨拶だ。

「何度見ても白い制服のサリュは愛らしいなあ……見るたびに惚れ直してしまうよ」

兄上はいつもぼくに手放しの賛辞を贈ってくれるので、照れてしまう。

「なあサリュ。花びらが舞ってとても美しいが、この木はサクラーと言ったか？」

「はい。サクラは花が散ったあとに実をつけます。その実も甘酸っぱくて美味しいですよ」

インナーが見せてくれた桜は、ソメイヨシノという品種で実はない。

でもせっかく桜を生み出すのならサ克蘭ボも食べたいので、大地には実のなる桜を想像しながらお願いした。だからたぶん、夏前には美味しいサ克蘭ボが食べられる……はず!

「そうか。また美味しい果物がひとつ増えるのだな。そしてなにより、花が美しい。まるでサリュのように、小さくて可憐で愛らしいではないか」

桜にたとえられるなんて、面はゆい。そう思いつつ恥じらうが、ぼくがモジモジしても、兄上の腰にお腹がブヨブヨ当てるだけなのだった。むうう。

「レオンハルト様、早く絵師に略画を描いてもらわないと、入学式に遅れてしまいます」

ミケージャの助言に、兄上はうなずいた。絵師はミケージャの馬と一緒に乗ってきたみたい。

兄上は軽々とぼくを抱き上げて鞍の前のほうに座らせ、ぼくの後ろに颯爽とまたがった。

桜の木の下で、黒馬に乗った兄上とぼく。というシチュエーションで描いてもらうのだ。

絵師がスケッチを紙にさらさらと描いていく。

これまで絵を描いてもらうという経験はなかったので緊張してしまう。張り切って胸を張ろうと

すると腹が突き出て、唇もむむうっとへの字に引き結んでしまった。

「サリエル様、もう少し表情を柔らかくお願いします。笑顔、笑顔で……」

絵師に言われて笑うが、なんか違う。いつものように笑おうと意識すると、なんだかどんどん変な顔になっていく。自分がどんな顔をしていたのかわからない。顔面崩壊寸前だ……

「サリュ、コチヨコチヨしてやろうか？」

兄上が耳元で囁く。その低くてまろやかな美声が鼓膜をくすぐって、耳がこそばゆい。

「やめてください、兄上！ 顔面崩壊が増大します」

「ああ、もっと頻繁に絵師を呼んで、サリュを描いてもらえば良かったなあ。赤子のサリュの肖像は本当に残すべきだった。そういう頭が働かなかったのは、痛恨の極みだ」

そんなことを言いながら兄上が顔をしかめると、絵師に『顔が怖いですよ、リラックスしてください』と注意された。ぼくらはふたりでエヘリと笑った。

「サリュは、ほがらかな明るい笑顔が可愛いのだ。絵には、そういうサリュを残してほしいな」

クスクス笑いながら兄上が言うから、ぼくの顔はどんどん熱くなる。

やーめーてー!! 兄上の褒め殺し攻撃が、ぼくの顔面崩壊を加速させるう!!

嬉しいは、嬉しいのだけど。そう思いながら、はにかんで兄上を見上げて笑うと……

「はい、オーケーです。いい絵が描けそうですよ」

絵師がそう言って終わりになった。大まかに描いたあとは、絵師にお任せになるようだ。あとは絵の出来上りを待たばかり。どんな絵になるのか、今から楽しみだね。

「では、サリュ。玄関前に馬車を待たせてあるから、そこまで一緒に乗っていくぞ。しつかり鞍くらの手摺てすりにつかまっていなさい」

兄上はぼくを馬に乗せたまま、桜の木を黒馬で二周して、それから丘を下っていった。

ぼくは六歳のときに落馬して以来、ひとりで馬に乗るのを諦めていたけど、やっぱり馬に乗るのは楽しい。自分で馬を操って、風を感じて走る格好良さに憧れてしまうね。

でもこうして兄上とふたり乗るのも楽しい。なんだか兄上との距離が近いからか、心がほのかに温まってドキドキしちゃう。

ただ……兄上の黒馬がぼくらの重量に耐えられるのか心配だった。

幸せな時間はすぐに終わり、ぼくと兄上は屋敷の玄関までやってきた。並走してきたミケージャは馬から降りると、手綱たなづなを厩舎うしやの職員に預ける。

兄上の黒馬は、ぼくのようなぼっちゃりが乗ってもおとなしくしていた。

「重かったでしょう？ お疲れ様。次もまた、乗せてくださいね」

だから、ありがたうという気持ちをかめて馬の首をナデナデしてから、馬から降りる。厩務員に連れていかれる黒馬に手を振って見送った。

そして学園に行くための馬車を目にして驚愕した。だって、とても立派なもの。

大きさも横幅も普通サイズの二倍くらいある。色は黒で艶つやめいたコーティングもされていて、扉にはドラベチカ家の紋章がでかでかについていた。あ、車のステップに金色で羽模様の装飾が施されている。結婚披露のパレードで見るような豪華仕様の王族の馬車だ。

「さあ、サリュ。馬車に乗って」

ミケージャが馬車の扉を開けてくれて、兄上がぼくに手を差し出す。

これはエスコート？ やんごとなき姫君のような扱いで、なんだか照れちゃうね。

「兄上、この馬車で学園の入学式に行くのですか？ ちょっと、派手では？」

「いいから。遅刻してしまうよ」

ニッコリと機嫌が良さそうな兄上を拒むことはできず、兄上の手に丸い手をプヨと乗せた。

ただどね、十二歳のぼくはもう兄上の補助がなくても馬車を乗り降りできるんだからね。今まではお腹で足下が見えなくて怖かったけど、時間をかけて克服し、つい最近になって手摺りにしっかりとつかまれば乗り降りできるようになったんだ。

でも兄上が補助してくれると、馬車に上がるときにふわっと引き上げてくれるから、空を飛ぶような感覚になって気持ちいい。だからたまにお姫様気分でエスコートを受けるけど、それ以外はちゃんとひとりでできるもん。

そうして馬車に乗り、席に着いた。左隣に兄上が、そしてぼくらの対面にミケージャが座る。いつもの位置だ。

ミケージャが扉を閉めてコンコンと御者に合図を出すと、馬車はゆっくり動き出した。

では気持ちを新たに、いざ、ロンディウヌス学園へ！

馬車は内装もすつごく豪華だ。革張りの座面は座り心地が柔らかいし、壁や柱は飴色の艶のあるしつかりとした木材を使った頑丈な作りだから揺れも少ない。

大きな体格の兄上が座っても、天井も横幅もまだまだ余裕があるほど広くて……というか、兄上の脚ながーい!! そんな兄上がスルリと脚を組んで座ってちょうどいいので、ぼくには座面が高かった。足が床に届きません!!

しかしこの馬車では、王族が乗っているというのがあからさまになってしまう。ぼくは王族だという意識が薄いから、ちよつと気後れしちゃうな。

「サリュ、こういうのは最初が肝心なのだ。先制パンチというやつだよ」

「先制パンチ、ですか？」

意味がわからず、ポヤツと見上げて首を傾げると、麗しい顔で兄上が笑った。

「魔王の三男である私の婚約者が、私に大事にされてご登校、ということを知らしめるためだ。子供会に来ていた高位貴族の子弟は、サリュにちよつかいを出したらひどい目に遭うと認識しているだろう。だが学園には、子供会に来ていなかった低い身分の貴族の子弟や、優秀ではあるが王城のことをよく知らない市井の子などもやってくる。そういう者でもこの馬車を見れば、サリュがどういう立場にあるかひと目でわかるだろう」

「……わかったら、どうなるのですか？」

ピヨと再び首を傾げると、兄上はにやりと悪い顔で笑った。

「サリュがあななどられることは少なくなる。まあ、公爵家のマルチェロやファウストがおまえをそばで守ってくれるから、そう愚かな真似はできまいが」

「ファウストが？ でも、ファウストはラーディン兄上のご学友ですよ？」

ファウストもマルチェロもぼくのお友達だけど、一学年上のファウストは、ラーディン兄上のご学友でもあった。

「ラーディンの学友だが、サリュの騎士だろう。本人もそう言っていた」

「確かに悪^あしき者の手からお守りいたしますと言われるてはいますが……というか、兄上はいつの間にファウストとお話したのですか？」

それは初耳だった。ファウストが学園に入ってしまったから、ぼくはここ一年ばかり会っていないというのに。ぼくのお友達なのに、兄上、ズルいい！

「ファウストとも、バッキヤス公爵とも話したよ。学園に入学したサリュをくれぐれもよろしくとお願ひしたら、快く引き受けてくれた」

ファウストの生家であるバッキヤス家は騎士を率いる一門で、王族の守護が絶対という信念を持つ家だから、次期魔王の兄上にそう言われたら引き受けるしかないと思う。

でもバッキヤス家はファウストを、ラーディンのそばにいさせたかったはず。

魔王の三男ではあるが、義理の息子で血脈なしツノなし魔力なしのぼくなんかより、正統な血脈の第二王子であるラーディンと仲良くなったほうが箔^{はく}がつくのだ。

それに、レオンハルト兄上を守るお役目を目指すラーディンとバッキヤス家は、利害が一致している。学園で仲良くなった息子とラーディンが将来魔王となるレオンハルト兄上を守る。そのような未来図を、バッキヤス公爵は予想していたのではないかな？

「ぼくを守るお役目だなんて、ファウストやバッキヤス公爵はがっかりしたでしょうね」

「それは、自分の目で確かめなさい」

自信なくそう言うぼくに、上機嫌な兄上は上機嫌なまま答えた。

そんな話をしていたら、ロンディウヌス学園の校門が見えてきた。

手前に馬車専用のロータリーみたいなものがあり、高位貴族の馬車が渋滞を起こしている。今日は入学式だから新入生のご両親もいっぱい来ているみたい。

でもぼくらの馬車はそこに並ばず、校門をくぐり学園の敷地に入ってしまった。

「あ、兄上、ここは馬車が通ってもいいのですか？」

「ああ、今日は特別だ。私はサリュの父兄として出席するが、ドラベチカの後継が通学路を歩いたら騒ぎになるだろう。だから、講堂の入り口に馬車をつけるように事前に連絡があったんだ」

すごい、学園長にそんなことを言われるなんて。さすが、兄上！

ぼくが驚嘆している間にも馬車は学園の敷地を進み、校舎前を通り過ぎ、奥のほうにある講堂へ向かう。到着した先では、ラーディンやマルチェロ、そして大人の人がいっぱい、レオンハルト兄上とぼくを出迎えてくれた。

それだけではなく来年入学するはずのシュナイツとマリーベルもいて、その後ろには多くの見知らぬ生徒たちがずなりになって興味津々でこちらを見ていた。

まずはミケージャが馬車から出て扉を支えると、兄上が黒い馬車から出る。すると、おとおと感嘆の声が上がった。

でも兄上が生徒たちを睥睨^{へいげい}すると、打って変わって辺りはシンと静まり返った。

すごい、これが魔力の多さや威厳で人を制するという、アレなのですね？

六歳のお披露目パーティーのときに、父上である魔王のやりわりしたやつを見たけど、兄上のははじめて見た。

兄上はどんな顔をしているのでしょうか。でも兄上がぼくを振り返ったときには、もう柔らかな表情になっていた。

えええええ!? ぼくも兄上の睥睨^{へいげい}する顔、見たーい!

きつとキリツとギンとしていて、眼光の鋭さに胸をギュンと貫かれるのでしょうかねっ!

まあでもとりあえず、ぼくも馬車を降ります。

差し出してくれた兄上の手にプロと手を重ね、ふわああと浮くように飛び、シュタツと着地する。うーん、兄上のエスコートはいつも最高に着地がしつくりきます。気持ちいい!

そうしてぼくは、ロンディウヌ学園での学生生活の第一歩を踏み出したのだった。

なにやら遠くのほうから、丸い、丸い、とかすかに聞こえてくるけど……でもいいのだ。今日は入学式という晴れの日だからね。ちよつと失礼だけど怒りませんよ、ふふふ。

「レオンハルト様、この度はサリエル様のご入学、おめでとうございます」

心の内でそんなことを思っていると、ぼくと兄上の前に大人の人が出てきて頭を下げた。どうやらロンディウヌ学園の学園長みたい。こめかみの辺りから上に伸びる青みがかったツノ、そしてやりわり笑顔のおじさんは頭を上げて、兄上に話しかけた。

「レオンハルト様がお育てになったサリエル様は、わが校の試験でとても優秀な成績をおさめられ

ました。教師一同、感嘆しております。レオンハルト様もわが校においでいただけたら、神童と呼ばれたことでしょう」

学園長が立て板に水のごとく、兄上に祝辞を述べていく。

入学の前に学力を見定めるための試験があつて、そのことを話しているみたい。

というか、ぼくを介して兄上を褒める技が秀逸です。学園長、すごい。

「学園長、祝いの言葉をありがたく受け入れよう。私の婚約者であるサリエルが楽しい生活を送れるよう、見守ってもらいたい。大事な子なので、くれぐれもよろしく頼む」

兄上がぼくの肩に腕を回して学園長に言うのと、やはり生徒たちがざわざわしはじめた。

ぼくが兄上の婚約者だというのは、知る人ぞ知ること。はじめて聞く人も多いだろうから仕方がないけど……あの丸いのが、丸いのが……というのは失礼ですよ! ふふふふ。

そうしたらプツと誰かが噴き出すのが聞こえた。魔王の次男で、ぼくの一歳上の兄上……いや、失礼な兄上こと、ラーディンだっ!!

「おまつ……白い制服はやバいと思っていたが、やつぱり、白くてまあいい、ニワト——」

「ラーディン。兄として先輩として、おまえにサリエルを任せても良いのか?」

兄上は笑顔ながら、こめかみに怒りのマークを浮かべている。しかし、時すでに遅しだ。

生徒たちはもう、ニワトリ、ニワトリ、丸いニワトリ……とこそそと言いはじめてしまった。もうっ! ラーディンのせいで陰でニワトリと呼ばれるのが確定しちゃったよ。ムキィイツ!!

「はい、兄上。お任せください。サリエルのことは俺がしっかり守ります」

嘘つけえい、と心の中でツッコむ。

……うーむ。ラーディンにはどうしても言葉づかいが荒くなってしまふな。いけない、いけない。いつもののほほんを取り戻さなければ。

「おまえの言葉や態度でサリエルの居心地が悪くなるようなことがあったら、許さないからな」

ラーディンは兄上に威圧され、身を縮こまらせた。反省してください。

「サリエル様、お久しぶりです」

ラーディンのそばにいたファウストが前に出てきて、ぼくの前で地面に膝をついた。

ファウストは大きいから、膝をついた状態のほうがぼくと目がしつかり合う。いや、黒くて重たい前髪が目隠していて、厳密には目は合っていないけど。

というか、制服が黒色です。みなさん白い制服なのに、ファウストはデザインは同じだけどぼくらとは色違いの制服だった。特注なの？ 制服の下に着るシャツも黒いスタンドカラーで、髪色とマッチしてシュツとして見えるね。あ、ファウストの備考欄には『冷酷^{れいさく}の黒騎士』って書いてあるから、きっとファウストは黒が好きなんだな？ うむ。

彼は十三歳だけど、もう兄上と同じくらいの高身長なんだ。体が出来上がっている感じ、格好良いよね。ぼくなんかまだまだ成長途中で……いえ、成長はまだ止まってませんからっ。

「おはよう、ファウスト。一年ぶりだね。また、お友達としてよろしくね」

「ああ、サリエル様。ずいぶんと大きくなりましたねえ。もうすぐ私の身長は抜かされそうです」
「大きくなったの、わかる？ でもファウストを抜かすのは無理ですよお」

あははと笑い合うと、ラーディンは驚いたようにぼくらをみつめた。

「ファウストが笑った。この一年、無愛想な顔で俺の後ろに突っ立っていただけのファウストが必要最低限の言葉しかしゃべらなかつた、あのファウストがつ!? サリエルと談笑??」

「ファウストはラーディン兄上のようにがさつじやないのです。寡黙で思慮深いのですう」

ぼくの言葉に、ラーディンはケツと吐き捨てる。しかしファウストはさりと彼を無視してぼくをみつめた。

「私はラーディン様のご学友ですが、この度レオンハルト様の命を受け、サリエル様の護衛に任じられました。学年が違うので始終おそばにいられるわけではありませんが、できうる限り守護させていただきます」

「話は聞いています。あの、本当に無理のないようにね。それにぼくたちはお友達なのだから、固くならず、気安く接してください。リラックス」

「もったいないお言葉です、サリエル様」

ファウストはぼくの手を取り、キスするフリだけして離す。そして立ち上がると、ラーディンの後ろではなく、ぼくの後ろに立った。

なんだか本当に騎士に守られているみたい。大事にされる感じがくすぐったいね。

「マリーベルたちがいないから、一年はサリーをひとり占めできると思つたのに、ファウストがいなか……」

マルチェロがぼくの耳元でこっそり言う。一番はじめにぼくのお友達になったマルチェロは、親

しみをこめてぼくをサリーと呼ぶ。けれど兄上には許されていないから、こっそりなのだ。

「つていうか、今年の総代は私らしいのだけど、なんでサリーじゃないのかな？」

ちよつとオコな雰囲気もあるけど、それはさあ、わかるでしょう。

「新人生のみなさんが、こんなぼつちやを見たいと思いますう？　みなさん、白馬に乗った麗しの王子様を見たいのですよ。世間というのはそういうものです」

「私は白馬なんか持っていないし、王子でもないけど。むしろ王子はサリーでしょ」

「似たようなものです。いえ、ビジュアルでは圧倒的にマルチェロが王子です！」

「えええ、面倒くさあ……」

「ぼくは入試問題を一問、解きませんでした。マルチェロが総代なのは全問正解したゆえの実力ですから、素晴らしいことです」

ぼくがうなずくと、マルチェロは仕方がないなあと言って、笑った。

「パンちゃん、入学、おめでとう」

マルチェロが下がると、今度はサリーベルがお祝してくれた。

サリーベルはマルチェロの妹で、ミルクティー色の長い髪が印象的な令嬢だ。いつも華やかな笑みを浮かべている……のに、なんで泣いてるの？

「パンちゃんが一年、子供会に來ないなんてえ……」

「泣くなよお、サリーベル。私も泣きたくなるじゃないかあ」

サリーベルの隣で、シュナイツも目をウルウルさせている。

シュナイツは魔王の四男で、サリーベルの婚約者だ。つまりぼくの弟なのだが、なんでかぼくをお嫁さんにしたいと言って、ぼくと兄上の婚約破棄を虎視眈々と狙っていた。

つか、この場にいるぼくの知り合いはみなさん婚約破棄虎視眈々と狙っていた。

「シュナイツはその気になればぼくに会いに來られるでしょう？　お隣なのだから」

距離は遠いけど、実質、兄上の屋敷の隣はシュナイツの屋敷だ。

「私が勝手にサリーベル兄上にお会いして、それがサリーベルにバレたら、面倒くさいくらいに怒られるので」

「当たり前でしょう。抜け駆けは禁止だわ！」

サリーベルがそう言い放ったとき、兄上が口を開いた。

「おお、いい感じに婚約破棄虎視眈々勢が集まっているな。では今ここで宣言しておく。サリーベルのお友達諸君、私がサリーベルと婚約破棄することはない。ゆえに、サリーベルのことは早々に諦めてもらいたい！」

「兄上、それは承服しかねます」

高らかな兄上の宣言に、一番に待ったをかけたのはラーディンだった。

「サリーベルが兄上との婚約を望まなくなるかもしれませんが」

「ほう、ラーディン。この私に言うようになったではないか」

兄上は、魔王と対峙したときより抑えてはいるが、ラーディンとバチバチに睨み合う。

「ストローツプ、兄弟喧嘩はいけませえーん」

ぼくは短い腕を伸ばしてふたりを制した。兄上と魔王のときはこれでおさめられたのだ。

「そうだね。次期魔王様のお言葉でも、サリエルを諦めるのは時期尚早かな」

しかしマルチェロが火に油を注ぎ、マリーベルたちも口々に「諦めな―い！」と言いはじめた。兄上は額の御ツノを赤くして、ぶすくれてしまう。

ぼくは兄上の腰にブヨツと抱きついて、こっそり言った。

「兄上え、婚約破棄虎視眈々勢、恐ろしいでしょう？」

「ああ、私の言葉を公然と無視するとは、婚約破棄虎視眈々……は長いから、こいつらはもうコシタンで良いな。コシタンめ、一筋縄ではいかないな！」

ぼくと兄上の不愉快な気分が空気を重くする中、入学式の時間が迫ってきたことに気づいた学園長が口を挟んだことで、とりあえずこの場は散会になった。

まだ入学式ははじまっていないというのに、なんだかドツと疲れました。

いろいろあったけど、入学式のため生徒たちは学園の講堂へ赴いた。

インナーは講堂を映画館みたいだと言った。一段高いところに舞台があつて、固定された椅子が並んでいる構造だが、インナーの世界にも似たようなものがあるんだなあ。

新人生は前方に座り、後方は家族と在校生の席だ。

「今年はレオが参列しているから、ひと目見たい者たちが大勢集まっているね。昨年もラーディンが入学したから出席者は多かったけれど、ここまでではなかったって聞いているよ」

隣でマルチェロが解説してくれて、ぼくは顔を上げた。講堂の二階には高位貴族専用の貴賓席が

あり、そこに兄上がいるのだ。

貴賓席にはレオンハルト兄上、ラーディン、シュナイツ、さらに三大公爵家であるマルチェロのご家族がいて、こちらを見守っていた。

『あ、これ映画館なんて庶民のやつじゃなくて、オペラ座の最上級観覧席だ。ゴージャスう！』

貴賓室内はえんじ色の分厚いカーテンで飾られていて、柱や手摺りの設えに緻密な彫刻が施されている。本当に豪華だね。

ぼくが見上げているのにマリーベルが気づいて、手を振ってきた。だからぼくも胸の前で小さく手を振る。えへへ、入学式ってなんだかドキドキそわそわだけど、家族に見守られていて、恥ずかしいというか照れくさいというか、そんな気分になるね。

そして、ようやく入学式がはじまった。

学園長の言葉や在校生の祝いの言葉をいただき、そのあと総代であるマルチェロが舞台上上がる。マルチェロが学園生活の抱負などを流麗に述べると、令嬢たちがキャーと反応した。

ね、やっぱり試験問題を一問解かないで正解だったでしょ。令嬢はいつの時代も、ぽっちゃり丸鶏ではなく、白馬に乗った王子様を御所望なのである。

そうして、入学式は無事に終わった。

その日の新人生は家族と帰宅してよいとのことで、ぼくは兄上と一緒に、あの豪華な馬車に乗って屋敷に帰ったのだった。

一夜明けて、今日から本格的に学園生活がはじまる。

もう兄上と一緒に登校できないし、ミケージャもエリンもないから、完全にひとりになるのだけど、ううう、ちよつと心細いな……。でもこれが大人になるといふことなのだと、ぼくはまあい拳を握った。

意気揚々と玄関を出ると、車寄せにきらびやかな馬車が止まっていた。扉についているエンブレムはバッキヤス公爵家の紋だ。

「おはようございます、サリエル様」

馬車から黒い制服を着たファウストが颯爽と降りてくる。ぼくがあんぐりと口を開けてファウストをみつめていると、後方から兄上がやってきた。

「学園内では大人の護衛をつけられないから、バッキヤスにサリュの送り迎えを頼んだのだ。授業中はマルチェロが、登下校時はファウストがサリュの警護をするから、サリュは必ずふたりのうちのどちらかを伴うようにしなさい」

「……わかりました」

王族が学校に通うのって大変なんだなあ、と他人事のように思ってしまう。ぼくはイマイチ王族という意識が薄いんだけど、とりあえずうなずいておいた。

「サリエル様、うちの御者の顔をよく覚えておいてください。彼以外の馬車には決して乗らないようにお願いします」

ファウストが説明すると、御者が降りてきてぼくの前で一礼する。

え、これは誘拐対策？ いやいや、ぼくなんかを誘拐しても、なんにも出ないよ。ぼくが、魔王との血脈なしツノなし魔力なしの落ちこぼれ三男だつてことは、魔国の国民ならみなさんご存じだもの。でもこうして万全の対策をしてくれることは、とてもありがたいことだね。ちゃんと言われた通りにしよう。

そうしてぼくは、ファウストの馬車に乗りこんだ。

兄上がぼくを見送ってくれるので、窓から手を振ってそれに応える。

いつもはぼくが兄上をお見送りしていたから変な気分だ。それに、馬車が動いて兄上の姿がだんだん遠ざかっていくのを見ると、なにやら悲しくなってしまう。くすん。

馬車は家の敷地を出て、軽やかに進みはじめた。

そういえば、とふと思ひ出して、隣に座るファウストを見上げる。

「ファウスト、送り迎えは兄上が無理を言ったのではないですか？ だとしたら——」

「まったく問題ございません。というか、最初はマルチェロがこの役目になりそうだったのですが、私がマルチェロは教室ですつとサリエル様の御側にいられるのだからズルいと申し上げて、この御役目を勝ち取ったのでございますっ!!」

長い前髪で表情が見えないけど、被せ気味かつ拳を握って力説したので、嫌々従っているわけ

はなさそうだ。

「ならいいのだけど。ぼくを守る御役目だなんて、バッキヤス公爵やファウストはがっかりしませんでしたか？　もしそうなら、兄上に相談しますけど……」

「がっかりなど、するわけがありません。学生のうちから光栄な御役目を賜り、バッキヤス家一同喜んでおります。サリエル様に求婚してしまった私をレオンハルト様は寛大なことに許してください、さらにはサリエル様を御側で守護するよう命じてくださった。私は感無量でございます。レオンハルト様のお心に報いるため、命を賭してサリエル様をお守り申し上げます」

「固いよ、固いよ、ファウストお!!　一年会わなかったら、こんなにカッチカチになっちゃってえ。ぼくたちはお友達でしょ？　もっと気安くね」

ファウストは前髪から真剣な目をのぞかせて言い募^もった。兄上は、ファウストがどう思っているかは自分で確かめなさいと言っていたけど、ファウストは全然がっかりなんかしていないみたい。きつと兄上は、無用な心配だつてわかつていたんだね。

ぼくはホツとした。喜んでもらえたのなら、ぼくも嬉しい。

「あと、命は賭けなくていいからね。ゆるふわつと守ってくださいませ。でも気持ちは嬉しいよ、ありがとう、ファウスト」

ぼくがそう言うのと、うなずきはしなかったが、ファウストはそつと微笑んでくれた。

警護は仕事だ。ファウストは真面目な性格だから、任されたことをおろそかにできないのだろう。だからぼくの言葉にうなずくことはできなかったのかも。

でもね、ファウストとはお友達だから、普段はお友達としてそばにいてくれて、いざというときだけゆるふわつと守ってくれたら、それでいいんだ。へへ、お友達とか言うの、なんか照れるね。魔王城は王都の一番高いところに建っている。馬車はそこから王都の街に降りて、ロンディウス学園への道を進む。高台に建っている学園へ通じる道は一本しかないから、学園に用のある者しかその道を使えないことになっている。

ちなみに学園の敷地の裏手には、魔獣の住む森が広がっている。でも、そんなに危なくはないらしい。学園には魔獣を狩る授業があるんだけど、その対策のために危ない魔獣は狩りつくされていくって、マルチェロが言っていた。

とにかく、裏手側からは誰も入れないから、一本道だというわけ。

王都から高台にある学園への道を上っていくと、ロンディウス学園の校門が見えてくる。

昨日は講堂の前に馬車をつけたが、今日はちゃんとロータリーに並んで降車の順番を待つ。降車所に着いてファウストと一緒に馬車を降りると、すでにマルチェロが待っていた。

「おはよう、サリー。今日から毎日サリーの顔を見られると思うと、嬉しくてならないよ。泣き濡れた妹の顔を見たから、さらに気分爽快だ」

「お兄ちゃんだから、妹に優しくしてあげてください」

彼の言葉で、マリールはまだグズッているのだとわかる。昨日も、飛び級で入学するって騒いで大変だった。

そうして、右にマルチェロ、左少し後ろにファウストが並ぶという新たな布陣で、ぼくらは教室

に向かった。

姿勢の良い高身長で、黒々とした長い髪、とても凛々しい顔貌である、騎士っぽいファウスト。小顔の八頭身で上品なたたずまい、キラキラ金髪で緑の瞳の王子様っぽいマルチェロ。

そんな彼らに挟まれた、白くて丸くて赤いトサカの、ニワトリっぽいぼく。やっぱり目立つっちゃうのだろう。令嬢がひそひそ、貴族の子弟がコソコソ、ぼくらを見ながらなにかを言っている。

「一目目だから仕方がないけど、ウザいねえ」

爽やかな笑顔で、マルチェロが毒を吐いた。

「直接、失礼なことを言ってきたら、斬って捨てます」

「ダメですう。穏便にお願いしますよ」

ファウストもボソリと怖いことを言うので、すかさず訂正した。みなさん、仲良くしてえ！

大勢の視線にさらされながら一年生の教室に到着すると、ファウストは膝をついてぼくと視線を合わせた。

「サリエル様、なるべくお待たせしないようにいたしますが、もしも私のほうが授業の終了が遅くても、教室から出ずマルチェロとともにお過ごしください。ひとりで帰ろうとなさってはいけませんよ」

ファウストの忠告に、うなづく。そこで、ファウストは二年生なのに、一年生の教室までぼくを送ってくれたんだと気づいた。

「わかりました、おとなしく待っています。だからファウストも、遅くなっても慌てないように。ちゃんと最後まで授業を受けてくださいね」

「ありがたいお言葉。もしも予期せぬ事態が起きましたら、すぐにお知らせください。飛んできます」

教室に入ったぼくを見届けたファウストは、一礼して、その場を去った。

そのファウストの後ろ姿を、令嬢が扉から見送ってキャッキヤ言っている。

「黒騎士様だわあ、格好良いわね」

そうでしょう？ ファウストは素敵だものねえ。寡黙な騎士は格好良いのだ。ぼくは令嬢の気持ちがいだけわかる気がする、むふん。

教室はすり鉢状になっていて、生徒が座るすべての席から教師と黒板が見られるようになっている。席は百席くらいあって、机も椅子も頑丈で上等そうだ。さすが貴族の子弟が集まる由緒ある名門校だけあって、教室の柱ひとつとっても歴史を感じる。

マルチェロが席を探して階段を三段くらい登ったので、ぼくも彼について行く。

「サリエル・ドラベチカ」

するといきなり不躰に名前を呼ばれた。聞いたことのない声だ。

振り返ると、いかにも上級生といった体格のいい人たちが一年の教室に数人入ってきた。新一年生たちは落ち着きなくざわめきはじめる。

上級生っぽい彼らがまっすぐにぼくをめがけてやってきたので、マルチェロが前に出てかばって

くれた。

「王族の名を随分居丈高に呼ばれるが、あなた方は何者だ？ ファウストが離れたのを見計らってから教室に入ってくるような腰抜けの知人などいないが」

普段は温厚なマルチェロだが、言葉にトゲを感じる。だが上級生はそれに動じず言った。

「おまえに用はない。そっちのデブに用がある」

はああああっ?? 今までぼっちやりで濁っていたのに、はつきりデブって言いやがりましたよお!!

カチンときた。ラーディンに怒って以来のオコです!!

「おい、おまえ。レオンハルト様との婚約を辞退しろっ」

ヤギのように後ろに伸びる太いツノを持つ上級生。襟が紫色だから最上級生だな。なかなかイケメンの上級生は、目を吊り上げて怒っていて迫力がある。

いえ、怒りたいのはぼくのほうですけどお？ つか、ずいぶん唐突だね。

「貴様、自分がなにを言っているのかわかっているのか？ サリ……サリエル様は王族だ。貴様のその振る舞いは不敬と見なされてもおかしくないぞ」

「この者は魔王様の血脈ではないのだから、王族ではない。知っているぞ、サキユバスの連れ子とかいう下級悪魔。本来、この由緒正しきロンディウヌ学園に足を踏み入れられるはずのない小物だ。ツノも生えていないじゃないか。貧相で醜いなあ」

わあ、あからさまにぼくを見下しているね。ここまでの悪意をぼくにぶつけるのは、この頃は

ディエンヌくらいだったから、驚きと感嘆で二の句が継げません。

「なにも言い返せないということは、頭も弱いのだろう。とにかく、おまえはレオンハルト様に相応しくない」

ぼくを指さして上級生は言い切る。そして一転して、夢見るような顔をした。

「見たか、昨日の貴賓席にいらした、あの神々しいお姿を。あのように高貴で美麗で威厳に満ち満ちたお方のそばに、こんなどこもかしこもゆるんだ醜い豚がいるのは許しがたい。……ああ、なぜレオンハルト様の周りの者はお諫めしないのだ？ 私が仕えていたら、このような目が痛くなるような異物をそばに近づかせやしないのに」

どうやらこの上級生は、綺麗なもの至上主義のようだね。美しいものしか認めない、そういう人が身内にいたからわかる。

綺麗なものが好き、それ自体はいいのだ。兄上が神々しいお姿なのもそうだし、ぼくも綺麗とかキラキラとか可愛いものが好きだからね。

でも、それ以外のものを頭ごなしに否定し中傷するのはいけません。そういう価値観がすべての人に当てはまるわけではないのだから。

もちろんぼくも悲しくなります。どこもかしこもゆるんだ醜い豚、か。思わずぼくは手でお腹をポヨンと揺さぶった。

「その勘違いもはなはだしい汚い口を閉じろ、バフォメット伯爵子息」

名乗っていないのにマルチェロが家名を言い当てたからか、彼は目をみはった。でも、ヤギのツ

ノと似たツノを持つのはバフォメット家の特徴なのだ。将来ぼくらは兄上の仕事を手伝いたいの、魔王に連なる貴族やその特徴はすべて網羅している。兄上の配下になり得る者だからだ。

とはいえ、まずは名乗って挨拶するのが礼儀。あと、身分が上の者に下の者から話しかけてはいけません。

あ、エドガーを思い出しちゃうね。ぼくに早く声をかけると、いつも怒っていたっけ。

ぼくは一応魔王の三男なので、この学園ではラーデインの次に格が高い令息ということになる。学園生活はなるべく無礼講でいくつもりだけど、仮にも魔王の三男だから、不躰に呼び捨てられるのはスルーできないな。別にぼくは良いけど、ドラベチカ家があとだと王族の権威が揺らぐのでね。

ぼくがむすつとしていると、マルチェロが高潔ながらも鬼気迫る様子で続けた。

「レオンハルト様はこの方に膝をついて求婚したのだ。表面的なものしか見えていないおまえのような者が『私が仕えていたら』だと？ 片腹痛い。傑物であるサリエル様と比べたら、おまえは羽虫だ」

「はあ？ この丸いのが傑物？ なにを馬鹿なことを……レオンハルト様が学園に入学なさっていたら私がご学友になったはずなのだ。そうしたらこのような者は近寄らせず、レオンハルト様に相応しい御令嬢や、もしくは私が、婚約者になつたはずだ」

「はんつ、話にならないな。レオンハルト様は顔や容姿などに惑わされないからこそ賢君なのだ。彼は従兄弟の私でも、役立たずならば斬つて捨てる非情な男だぞ。おまえはきつと、レオンハルト

様をぼーっとと見ているだけの愚鈍な男なのだろう。三大公爵家後継たる私を軽んじるくらいだからな。あまつさえ次期魔王の婚約者に牙をむくとは……そのような輩がレオンハルト様に仕えるなど、できるわけがない！」

本当はぼくが怒らなければいけないのに、マルチェロが怒って全部言っちゃってる。口を挟む隙すらないよ。

「たとえサリエル様が婚約者でなくても、たとえレオンハルト様が学園に通っておられたとしても、おまえが友に選ばれることは決してなかったはずだ。わかったら、その勘違いを引っこめて我々の前に二度と現れるなっ」

勢いよく啖呵を切つて、すつきりと決まりました。すごい。格好良い、マルチェロお!!

しかし、バフォメット伯爵子息は呆然としたのもつかの間、全身をブルブルと震わせはじめた。

「くそつ、こんな大勢の前で辱められるとは、なんたる侮辱！ こんなデブのせいであつて、こいつがいるせいでえっ!!」

彼は怒りに任せて魔力を練り合わせると、ぼくに投げつけた。

すると、ぼくの宝石の防御魔法が発動——するまでもなく、ぼくの周りに綺麗な薄青のガラスのようなバリアが展開し、彼の魔法は弾かれた。

そしていつの間にか、バフォメット伯爵子息の前に、先ほど別れたはずのファウストがいた。

「レオンハルト様が寵愛なさっている婚約者を守る者が私たちふたりしかないけども思ったか？ そう思うことこそ浅はかだ。バフォメット伯爵家は、子弟の教育を怠ったばかりに御家取り潰しに

なりそうだな。残念なことだ」

高身長のファウストがバフォメット伯爵子息を見下ろしてつぶやく。その言葉は彼に恐れを与えたようだ。

「ま、待て。聞いてくれ」

「私に言っても仕方がない。この顛末はすぐにレオンハルト様の耳に入るだろう。レオンハルト様の目はどこにでもあるのだと、皆も、肝に銘じることだ!!」

ファウストが言い切る前に、バフォメット伯爵子息の取り巻きたちが脱兎のごとく教室から逃げ出した。息巻いていたバフォメット伯爵子息を置き去りにして。

そしてバフォメット伯爵子息も顔面蒼白になって教室を出て行った。

「逃げたところで、事を起こしたことに変わりはない。処分を逃れられるわけがないのにな」

前髪の隙間からギリリとした切れ長の目が見えた。騎士様の迫力、すごい！

「もう、サリーは。入学早々問題を起こすのだからあ」

マルチェロは張りつめた空気をさらりと流して、爽やかに笑いかけてくる。え？ これってぼくのせい？ ま、いいか。

「マルチェロ、あのバリアすごかったね。綺麗なガラスみたいで、魔法をバンと弾いて、格好良かった！」

「ああ、あれは私だけじゃないよ。サリーのすぐそばだけじゃなくて、あちこちに展開しただろう？ ファウストが言ったように、レオが置いた影のおかげだろうね」

影とはいったい誰なのかと教室をぐるりと見やるが、みなさん顔を横に振る。

「はは、すぐにわかるようじゃ、影失格だよ」

「憶測です。いると思うが、誰かは知りませんから」

マルチェロの言葉に続いて、ファウストもうなずいた。え、憶測なの？ じゃあ、いないかもしれないじゃん。ま、いいか。知らなくていいことは世の中にはいろいろあるからね。

「ファウストもすごいね！ ホントに飛んできた。でも、戻ってこさせちゃってごめんね」

「お気になさらず。あなたに怪我がなくて良かったです」

ファウストがぼくの手をニギニギするそばで、マルチェロがさらつと告げた。

「ファウスト、サリーが怪我をしたら、死、だよ。あとサリーの例の宝石の防御魔法が発動したら、我々は御役御免だからな」

「……そうなのか。いえ、大丈夫です。発動させませんから」

ファウストは抑揚のない声でそうつぶやくと、おもむろに教室から出て行った。

教室内はシーンと静まり返っている。なんかいろいろあって、みなさんもどつと疲れたような顔をしているけど……まだ授業ははじまっていますよ。

気を取り直してぼくとマルチェロは今度こそ窓際の席に座る。けれど、今度は教室がざわざわソワソワしはじめて、全然落ち着かない。

あああ……今の一件で、ぼくの友達はマルチェロオンリーになった気がするな。

だって、兄上のこととか御家取り潰しとか聞いたら、怖くて近寄れないでしょ!?

もう、バフオメットくん、きらい!!

★★★★★

入学初日から、なんでもか上級生に絡まれてしまったけど、そのあとは特に大きな事件はなく、ぼくは平和な学園生活をエンジョイしていた。

……とは言うものの……

「研究機関の調査によると、私たちが住むこの大地はかつて隕石の飛来によって焼け野原と……」歴史の先生が教科書片手にこの世界の成り立ちを教えてくれるのだが、それはいわゆる創世記に書かれている内容だ。魔族の子なら、幼少期に親に読み聞かせをしてもらうようなポピュラーな本だから、みなさん退屈して眠そうな目をしている。

特に瞬間記憶能力を持つぼくは、本で読んだものや人々の台詞などもすべて覚えているので、教科書をなぞられると本当に退屈なのだ。これから座学授業のすべての時間、今の同級生たちと同じような眠たげな目つきで先生をみつめることになりそう。

でも座学以外にも実習というものがあって、これが楽しみだったりする。

ぼくには魔力がほぼないので魔法の授業は落ちこぼれそうだけど、剣術はファウストに教えてもらったからなんとかなりそう。

ついで膝立ちで対峙するファウストの体勢を崩すことができなかったけど、騎士団の団長が、い

つ騎士になってもいいと言っているファウストはプロフェッショナルなもの。ぼくは太刀打ちできなくて当然なのだ。でもその彼に教えてもらったところが、キモなのです!

二年生になると、学園の裏にある森で魔獣を狩る授業があるから、そこでぼくの腕前を披露するつもりだ。むふーん。

そして剣術の他にも、淑女教育というものもある。男子は別にこの科目を受けなくてもいいのだけど、ぼくは次期魔王と目される兄上の婚約者なので、学校側から淑女教育を受けてくださいと指示があった。

いいですよお、ぼく、淑女教育は自信あります。ダンスやお茶会での礼儀作法、おもてなしの仕方、紅茶の淹れ方などなど、令嬢が学ぶものはひととおりに身につけているからね。

ダンスの先生にも『軽やかな妖精がお花の上で舞っているようなステップですよ』と褒められたことがあるんだ。

ディエンヌのドレスビリビリ期に培った裁縫のスキルにより、刺繍もプロ級の腕前だしね。

魔法は駄目だけど、淑女教育の科目で無双するからトントンでチャラなのだ。

今日の淑女教育の授業はダンスだ。ぼくはもちろいと背筋をそらし、調子に乗って足先も伸ばす。でも将来ぼくが兄上とダンスを踊るには、身長が圧倒的に足りないんだよね。ぼくの身長は今、兄上のウエストまでしかないからバランスが悪すぎる。だけどこればかりはどうにもならない……つか、ぼくはもっちりすら克服できないのだから、困っちゃうね。

本当なら兄上はもう社交界デビューの年なのだ。でもぼくはまだ兄上と上手に踊ることはできな

い。ダンスの相手をいっぱい待たせてしまうかもしれませんね。

早く大きくなりたーい！ でも、ぼくは育ち盛りだから大丈夫。身長はまだ伸びます。ここ六年ばかり育ち盛りを主張してはいるが、まだ、たぶん、伸びる……はず!!

そして淑女教育の授業が終わると、令嬢が寄ってくるようになります。

「刺繍しゅうのコツを教えていただきたいわあ」

「あのダンスのターンは、どのようにすれば綺麗に見えますの？」

「うちの領でとれた美味おいしい紅茶を、今度召し上がっていただきたいわあ」

などなど。バフォメット伯爵子息の一件で新しいお友達はできないかもって思っていたけれど、令嬢が気安く接してくれるのは嬉しい。

「サリィ。御令嬢たちは、次期魔王妃の君と懇意にしたいんだからね」

などとマルチェロは水を差すけど、いいのお！ 下心があっても、優しくしてくれる人は大事にしたいものですよっ！

少し夢を見させてくださあい!!

そんな生活を送りつつ六月になり、ついに入学式のときに頼んでいた絵が出来上がった。

縦三メートル、横二メートルの、とても大きな絵だ。桜の花びらが舞う中で、黒馬に乗ったぼくと兄上が優しい顔で微笑み合っている場面。

額装はハリハリトゲトゲした模様が黒と金でグネグネしていて、なにやらまがまがしくて豪華で

派手なもの。だけど、それ込みで絵画は超大作になったのだ。

その絵はエントランスの階段横にババーンと飾られた。お客様の目に必ず留まるすっごく目立つ場所だから、ちょっとだけ恥ずかしい……でも兄上は格好良いから、兄上だけは絶対に見てくださあい。

壁に飾られた絵を見ながら、ぼくは絵師さんに御礼を言う。

「こんなに素敵に描いてくださって、ありがとうございます。でも、兄上の相手がもつと可愛いお姫様だったら、もつともつと綺麗な絵になったのじゃないか」

兄上は言うに及ばず美男子で美しい。でも、付け合わせのぼくがこんななので、絵師さんは可憐な少女を隣に並べたかったのではないかと思ってしまったのだ。

でも絵師さんはゆっくりとかぶりを振った。

「とんでもありません。レオンハルト様のあの表情を引き出すことができるのは、サリエル様だけです。サリエル様とレオンハルト様が仲睦まじく並んだからこそ、ここまでの力作ができたのでございませう」

お世辞でも嬉しくて、照れてしまう。

兄上がぼくを見て、この絵のように穏やかで優しい顔でいつも笑ってくれるなら、それ以上の喜びはないよね。なら、まあいいか。

そして夕方になって、兄上が屋敷に帰ってきた。

「ああ、立派な絵ができたな」

絵を見てそう言ってくれたのが嬉しくて、ぼくは兄上の腰にぽよんと思いつき抱きついた。

「おかえりなさいませえ、兄上っ！」

「ははっ、元気だな、サリュ。昨日も可愛かったが、今日も可愛いとは何事だあ」

兄上はぼくの体を抱き上げ、支えるように手を回すと、ぼくを見下ろして笑いかけた。

『ぎやあああ、これは、駅弁の体位いいい!』

ああ、インナーがエロ知識を叫んで失神してしまった。もうっ！兄上にはそういう気はまるでないというのに……はしたなくて、すみませえん。

「サリュ……あの絵のように、私にいつも春風のような可愛らしい笑みを見せておくれ」

そう言っ、兄上はぼくのおでこにおでこを当てて、グリグリする。至近距離で美形が過ぎる顔でそんなことを言われたら、インナーじゃなくてもドキドキしてしまうよ。

兄上の長い藍色の髪が、ぼくの頬をさらりとくすぐる。まつ毛も長いから、瞬きをする音が聞こえてきそう。それくらい近いんです！顔がのぼせて目がグルグルになりそう。

でも兄上が望むから、ぼくはエヘッと笑った。兄上にも笑ってほしいのだ。

そんなふう、ゆるやかで、温かで、ちよっとこそばゆい日々が過ぎていく。

……いつまでも、こんな日が続いたらいいのだけどねえ。

★★★★★

三月三日は、ぼくの誕生日。サリエルは十三歳になりました。ヒューヒュー。

魔国には雪が降ったり一気に冷え込んだりする冬はないけど、肌寒くなる時期はある。もうすぐ暖かくなる時期だから昼間は温かい日も増えてきたけど、夜はまだコートくらい着ないと寒いね。

だけどぼくはもっちりだから、厚着をすると着ぶくれしてさらに丸くなる。むう……

そんなぼくはというと、今兄上とともに魔王城の庭園広場中央にある噴水の前にいます。

三角屋根の塔がいっぱい建ち並ぶ魔王城は夜になるとランプがいっぱい灯されて、ライトアップしている。そして噴水の周りにもいっぱいランプが設置されていて、色のついた水が出ると噴水の周りの石畳まで色づいて、とても綺麗だった。

ただでさえ着ぶくれするというのに、白いファアの襟飾りのせいで短い首が埋もれて丸みに磨きがかかっているぼくは、噴水の前にあるベンチに兄上と並んで座っていた。

兄上は、黒い衣装に黒マントというスマートな出で立ちだ。なにを着ても兄上は格好良くて、うらやましいなあ。兄上も噴水もとても美しいから、ぼくはあちこちに視線を移して、ほうっと感嘆のため息を漏らした。

「綺麗ですねえ。いつまでも見ていられますねえ」

この噴水は、兄上がぼくと一緒に噴水を見たいからと作ったものなんだって。お遊びのために噴水を作るなんて、驚いてしまうね。

ぼくも、パズルを作ったときはみなさん喜んでくれたけど、兄上に負けなくらい大きなものを作らないといけないな。……今は、考えつきませんけど。

とにかくぼくは、キラキラの水の粒をおとなく見守っていた。だって、はしゃいで水の妖精さんの邪魔をしたら……また噴水が壊れてしまうかもしれないからね！

以前に行った街のときみたいに、兄上の作った噴水を水ブシャーにするわけにはいきません。「この噴水ができた初日に来たときは、大勢の人がいてデートなどできなかったからな。いつかサリュと、こうしてゆつくり噴水デートをしてみたかったのだ」

兄上は優しい顔つきで、ぼくにそう言った。

デ、デート……!?

そうか、これはデートなんだよね。その言葉の響きに、ぼくはドッキドキであるう！

今日は誕生日だから、屋敷では御馳走をお腹いっぱい食べた。今日だけは、インナーもダイエツトって言わないから、ケーキもいっぱい食べちゃったあ。

お誕生日プレゼントには、兄上は色とりどりの糸のセットをくれた。百色もあるし、どの色とても素敵で、飽きずに何時間でも見ていられるくらいなのだ。学園の淑女教育で刺繍ししゅうを作る授業があつて、それがきっかけで刺繍ししゅうにハマっているんだけど、兄上はそのことを知っていたみたい。

「今度私にも、なにか作ってくれると嬉しいな」

兄上がそう言ってくれたので、素人芸ながら兄上になにか差し上げよう、なんて考えた。手作りのものを贈るときって、それを考えるだけでなんだか胸の奥がくすぐつたくなるね。

それだけでも嬉しかったのに。兄上とふたりきりですべて幻想的な景色の中でデートだなんて、夢のようだ。

まあ、厳密にはふたりきりではない。兄上は魔国の重要人物なので、護衛は離れたところながらあちこちにいるし、ミケージャもエリンもいる。

雰囲気ですよ。この世界にふたりきり、という恋人フィルターです。

ここ、恋人……は言いすぎましたかね？ いえ、ぼくは婚約者だからいいのだ！

「すごいですね、兄上。木の向こうのほうまでライトアップしたのですか？」

噴水の向こうにある公園の木々、さらにその向こう側もオレンジ色に染まっていた。夜だからライトアップが映えるなあ、なんて考えたのだけど……

「いや？ ライトアップはこの周辺だけだ」

「え、そうなのですか？ でも、あちらのほうが見えますよ？」

「……火事かもしれないな」

兄上はそうつぶやくと、そばにいた警護のひとりに様子を見に行くよう指示を出した。

でもぼくはなんだかとても嫌な予感がして、兄上に言った。

「兄上、ぼくも行きましょう」

「いや、大丈夫だろう。火事だとしても使用人が対処する」

「でも、あの方角にはディエンヌの屋敷があるのです。ぼくはとても不安です」

「……っ、せっかくのサリュとのデートだったというのにっ」

兄上は、オコです。プンスカです。でも美麗な顔でプンスカは、逆に可愛いです。

「申し訳ありません、兄上」

「いいや、許さぬ。では、これからは空中ランデブーだ」

兄上はマントを外してエリンに渡すと、大きな羽を背中から出した。片羽が兄上の身長と同じくらいの大きさの、コウモリみたいな翼だ。兄上が羽を出すのを最後に見たのはぼくが五歳くらいのときだけど、そのときよりもずっと大きく立派になった。

兄上はぼくを両手で抱きかかえると、翼を羽ばたかせ空を飛んだ。冷たい空気が頬に当たる。

「寒くないか？」

「平気です」

「なにもなかったら、デート続行だからな」

「はい。ありがとうございますす！」

ぼくは兄上にしがみついて、キュッと頬に頬をつけた。風は冷たいけど、ぼくのもっちりほっぺをつけていれば温かいでしょう？

デートに水を差されて兄上はさっきまでオコだったけど、今はなんだか楽しそうに空を飛んでいる。機嫌が直って良かったです。

噴水のあった広場から、兄上とぼくはディエンヌが住む後宮に向かって飛んでいる。林の向こうに見えた明るい光が迫ってきて……ぼくは落胆してしまった。

……ああ、なにもなければいいと思っていたのに……

ディエンヌが住む屋敷が燃えていたのだ。やはり悪い予感というのは当たってしまうものだね。二階建ての洋館の飾り窓から炎のオレンジ色が瞬いて、火の粉が夜の空を赤く染めている。

外に避難しているディエンヌは、その光景を見ながらなぜか高笑いしていた。

「おーっほっほっ、命が消えゆく炎の、なんて美しいことかしらあ？」

うわっ、性格がゆがんでいるのは知っていたけど、命が消えゆく炎なんて、ずっと不吉なワード。それを楽しそうに言う彼女の心もちが本当に理解できない。

ぼくと兄上は上空を飛びながらディエンヌの大きな独り言を聞いた。そしてぼくは兄上に、屋敷の周りを飛ぶよう頼んだ。

「ディエンヌの話しぶりだと、逃げ遅れている人がいるのかもしれませんが。ああ、兄上、あそこ!! あそこに人影が見えます!!」

最悪の想像が当たらなければいいと思いますが屋敷の中を観察していると、人影が見えた。でもその人影は、なぜか炎のほうへ走っているようだ。

滑空していた兄上は屋敷の裏にある草原に降りると、ぼくを地面に降ろした。

「兄上、あの人を助けてくれますか？」

「ああ。だが……ここにサリュをひとり置いていくのは気掛かりだ」

「大丈夫です。おとなしくここにいます。兄上にもらった宝石も持っておりますよ」

安心させるように、ぼくはコートの襟につけた赤い宝石を指で撫でる。だから、お願い。早くあの人を助けてあげて。そんな気持ちで兄上をみつめた。

「すぐに戻る。ここを動くな」

そう言って、兄上は炎が燃え盛る屋敷の中に、水魔法をまといながら飛んで行った。

兄上もどうかご無事で。ぼくは手をプヨと組み合わせて、神様に祈った。

この世界の神様は、大地に根づく精霊だったり、古びた建物だったり、名もない神や女神という曖昧なものだったり、天使だったり、ときには魔王だったりする。でもなんでもいい、誰でもいいから、兄上と屋敷の中にいるあの人を、どうかお守りください。

力のないぼくは、一生懸命祈ることしかできなかった。

そのとき、ぼくの宝石から警報音がブビーと鳴った。

辺りを見回すと、ゆっくりした足取りでディエンヌがこちらにやってきた。

「あらあ、サリエルう。どうしてこんなところにひとりでいるのかしらあ？」

どうしてってディエンヌは、ぼくらが上空を飛んでいたのを見てここに来たのだろうに。と心の中でツッコむが、それをこの高飛車な妹に言う気はない。だって絶対三倍返しにされるもん。

「火事が見えたから駆けつけたんだ。ディエンヌ、君は魔力があるのだから消火活動をしなきゃダメだろう？」

「うるさいわねえ。お説教とか聞かないわよ。でもちようどいいわあ。火事に巻きこまれて、あんたも死んじやえばあ？」

そう言っ、彼女は火の玉をぼくに向かって投げつけた。しかし宝石の防御結界が発動してぼくの前にバリアが現れ、火の玉は弾かれる。

あわわ、燃えカスが草原に落ちて、草が燃えちゃった。

「こんなことをしている場合じゃないだろう！ 逃げ遅れた人を屋敷の中でみつけたんだ。今、兄

上が救助している。屋敷の主人として使用人の安否を確認するべきだ」

「はあっ？ なに、余計なことをしてくれてんのよっ！ ホント、いつも私の邪魔ばかりするんだから！ 大体あんたは存在自体が邪魔なのよ。お母様もいつも言っていたわ、あんたを身ごもらなければ、どこへだって行けた。私はもっと自由だった。誰の子かわからないあんたさえないなければ、魔王妃として迎えられたかもしれないのに、ってね」

すっごい言いがかりで、ぼくの眉間がムニムニ動いた。

「ぼくを身ごもったのは、ぼくのせいではないでしょ。それに魔王様には正妻のマーシャ義母上がすでにいたのだから、魔王妃になるだなんて普通に考えて無理です」

「知らないわよ、お母様が毎日そう言っていたの。ぶつぶつと、ウザいんだから。つか、あんたも相当ウザいのよっ」

そう言っ、彼女はまた火の玉を投げてきた。八つ当たりにもほどがある。

でもそれは水の渦で弾かれた。ぼくを守ってくれたのは……レオンハルト兄上だああ！！

兄上は片腕で救出した女性を抱えていた。額に十センチくらいのツノがある薄茶の髪色の女性は、いわゆるメイド服ではなく、簡素ながら上品な紺色のドレスを身につけている。

息はあるようだがぐったりとしている女性を、兄上は優しく地面に横たえた。

「ディエンヌ。詳しいことはあとでじっくり聞かせてもらうが、これ以上サリュに手を出すなら、今ここで消し炭にしてやるが？」

兄上にギンと睨まれ、ディエンヌは不機嫌そうに腕を組んだ。赤色の眉を怒りでびくびくさせて